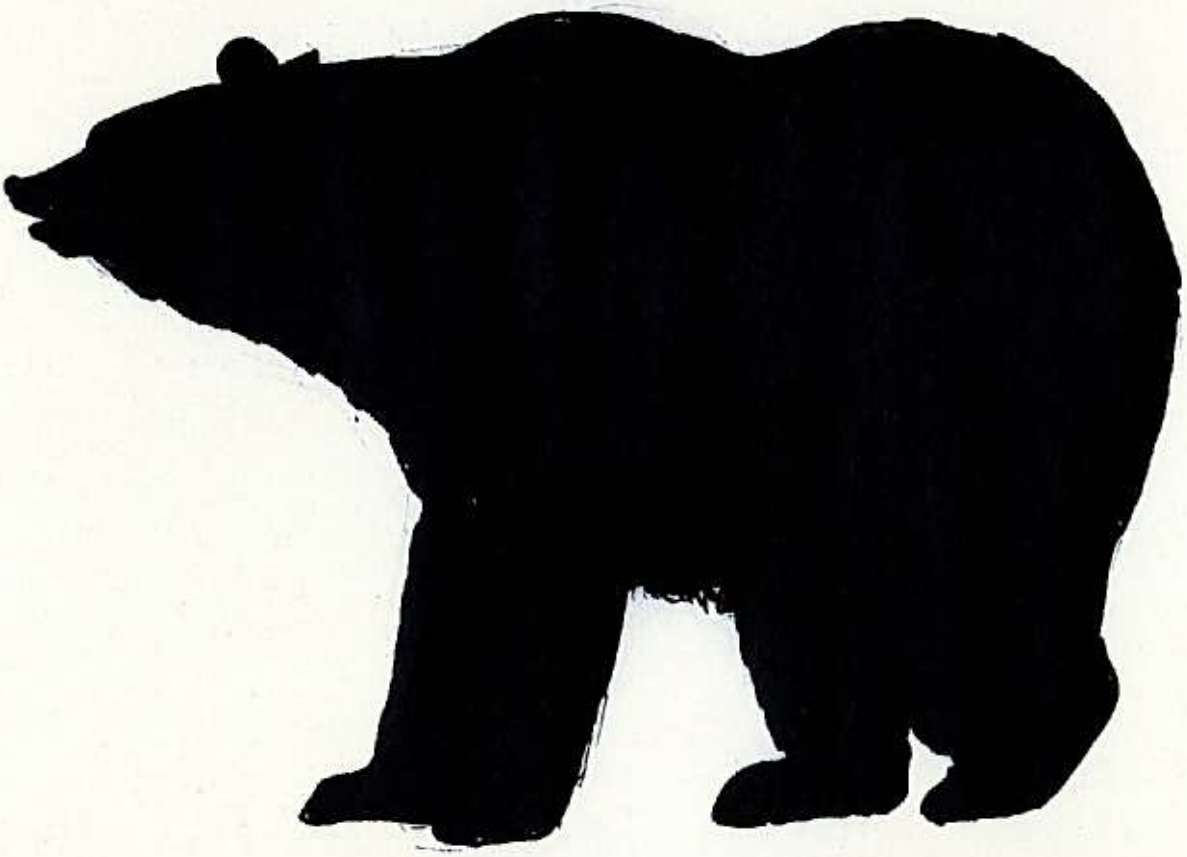
ヒグマ



恵庭中学校 1年4組

稀田 梨乃

No.

DATE

〈目　次〉

1 テーマ・テーマの理由

2 ヒグマが食べる物

3 ヒグマの分布

4 ヒグマのサイズ・習性・特徴

5 ヒグマの歴史

6 ヒグマの行動圏

7 なぜ街に？

8 どうして人を襲うのか？

9 万が一出会ってしまった時の対処法

10 結論と感想

11 参考文献

〈2、ヒグマが食べる物〉

〈クマの下剤 ⑦ 水芭蕉〉

水芭蕉

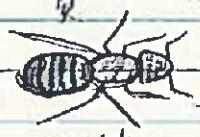
水芭蕉は クマの下剤と呼ばれているそう
水芭蕉には毒がある。葉や茎の汁の部分には『シュウ酸カルシウム』という成分が含まれていて これが有毒成分。
人間が手で触ると、かぶれたり激しいかゆみを引き起こす。
食べると、嘔吐や下痢、脈拍低下の危険もある。
クマは冬眠中に排便をしないため、意図的に水芭蕉を食べて便を排出している。

〈季節ごとの食べ物〉

春～初夏 … フキ（アキタブキ・オオブキ）を1番多く、その他にシドヤイラクサ・ミズバショウなどの植物の芽や葉を食べる。冬眠明けのクマにとって栄養が豊富で安定的に利用できる植物は重要な食物。

イラクサ

夏 … 柔らかく消化しやすい物が減る夏になると植物性の食物不足を補うために、アリやハチなどの昆虫を利用する。



アリ

～秋 … 春～初夏のような植物を割合を変えながら秋まで食べる。

夏～秋 … 植物の果実を食べる。サルナシ・ヤマブドウ・マタタビなどのツル性の植物の果実、そしてミズナラのドングリ（渡島半島ではブナの実）を主に利用している。シウリザクラやナナカマドの果実も利用する。ツキノワグマに比べるとブナ科の実（ブナやミズナラの実）への依存度はあまり高くない。

ミズナラのドングリ

昔人が見た熊は
魚を食べていた！

〈農作物の食害〉

昭和には、北海道の広い範囲で、クマが農作物を食害する事が知られているが主な被害作物は トウモロコシやテンサイ（砂糖大根）など。
この時期は、ヒグマにとって主食を植物の芽や葉から果実などへ変えていく移行期にあたる。そのため食料が不足する一方で栄養豊富な農作物が成熟するためだと考えられている。

トウモロコシ

テンサイ

No.

DATE

〈1. テーマ・テーマの理由〉

〈全体のテーマ〉

ヒグマはなぜ人里におりてきて人を襲うのか

〈このテーマにした理由〉

最近、札幌などの街にヒグマが出てきていて、人が襲われたりしているから疑問に思った。

〈8月1日～8月7日の1週間の札幌でのヒグマ出没情報〉

	日時		場所	内容
1	2021年 8月1日	23時20分	南区白川 1814番地 119付近	ヒグマを目撃
2	2021年 8月3日		南区豊滝 492番地付近(旧豊滝小学校跡地)	クマを目撃
3	2021年 8月3日		南区定山渓無番地(札幌自然山道入口付近)	ヒグマの鳴き声
4	2021年 8月5日		南区豊滝27丁目1番付近	足跡を確認
5	2021年 8月5日		南区定山渓無番地(国際スキー場入口より朝里方面へ約1km地点)	ヒグマを目撃
6	2021年 8月5日	8時50分	西区小別沢11番地2	糞出跡・糞を確認
7	2021年 8月6日	6時2分	中央区盤渓205番地2付近	ヒグマを目撃
8	2021年 8月6日	11時16分	南区定山渓無番地(中山峠頂上より札幌方面へ約200mの地点)	ヒグマを目撃
9	2021年 8月6日	21時25分	南区藻岩山167番地6付近(藻岩山公園付近)	ヒグマを目撃
10	2021年 8月7日		南区豊滝507番8付近	足跡・糞・毛を確認
11	2021年 8月7日	13時30分	南区真駒内 1819番地68付近(真駒内スキー場南側)	ヒグマを確認(親子)

この1週間だけでも11件もクマの出没情報があった。

〈自分の予想〉

食べ物が少ないから、食べ物を求めて街に来ているのだと思う。

〈3.ヒグマの分布〉

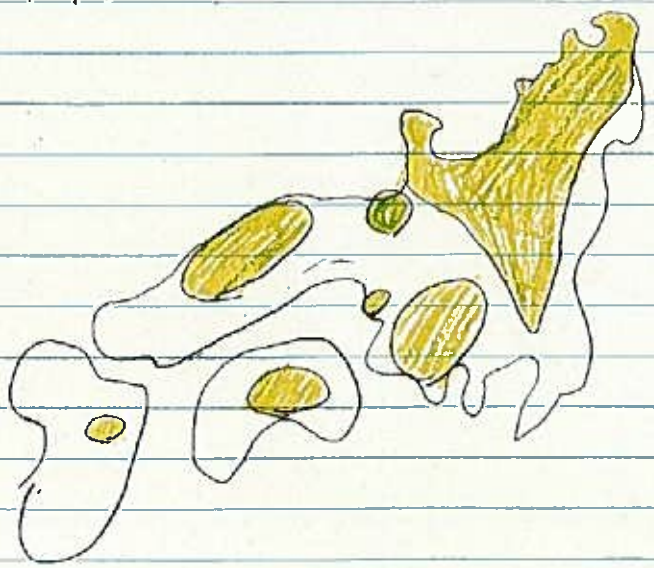
〈分布〉

全道のほぼ全域に生息している。
天塩・増毛・石狩西部地方の個体群は孤立して生息数が少ないため環境省のレッドリストに「絶滅のおそれのある地域個体群」として掲載されている。
北アメリカ北部・ヨーロッパ・アジアに生息し、世界で最も広く分布するクマ。
その生息地は温帯からツンドラ気候の地域(北極海沿岸など)にまで及ぶ。亜寒帯・冷温帯など寒地に生息するイメージが強いとされ実際にその傾向があるが、過去には地中海沿岸やメキシコ湾岸など南方の温暖な地域にまで及んでいて、人間による開発や乱獲によって減少し、人口密度の低い北方のみに生息するようになったとされる。個体群や亜種の絶滅は過去150年間に集中し、アラスカを除く北米大陸と西欧で著しい。

北半球に生息!

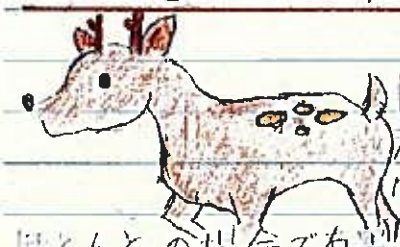
〈日本にいる もう1種類の熊〉

ツキノワグマ … ヒグマよりは小さい (110〜130cm)



四国と本州・九州の3都府県に生息している。
東日本→森林が連続。
西日本→森林開発や拡大造林がクマの生息地を分断し、個体群を孤立させた。

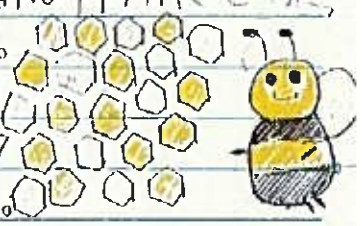
〈シカを食べるようになった理由〉



1990年代、北海道東部を中心にエゾシカの数が著しく増え、大量にシカの有害捕獲が行われた。それに対応してヒグマがシカを食べる現象が多く確認されている。これまでは殆どんとの場合で有害捕獲され処理された後に残されたシカの死骸、あるいは回収されなかったシカの死骸を食べていたと考えられている。しかし、クマがシカの味を覚えた結果、五年では生きたシカを襲って食べるリースが増加している。

〈クマは本当にハチミツが好きなのか〉

勘違いしている人も多いが、クマはハチミツ自体はそこまで好きではないらしい。クマは養蜂箱を襲撃するけれど、実際の狙いはハチミツではなく幼虫やサナギといったハチノコたち。蜂蜜は花の蜜からできているため、ブドウ糖や果糖といった炭水化物を豊富に含んでいる。もちろん蜂蜜がそこにあるならクマは食べるが一番に欲しているわけではない。一方でハチノコを食べればタンパク質や脂質を豊富に摂取できるため冬眠に備える事ができる。冬眠している間は何ヶ月にもわたって飲んだり食べたりしないので蓄えた栄養に頼るしかない。



また、仮に養蜂箱が都合のいいエサであったとしても、アメリカグマやグリズリーベアにとっては食料のわずかを占めるだけ。クマは根菜・木の実・虫・魚・哺乳類など口に入るものは何でも食べる。

ハチミツよりもその中の虫（ハチノコ）が目的！

〈クマは鮭のどこを食べる？〉

ヒグマは鮭の皮だけを食べて身を捨ててしまうという噂がある。
これは半分正解で半分間違い。どういう事かというと、11月に丁度遡上してくるサケ。11月はクマが冬眠に向けて栄養を蓄える時期でもある。
そのためサケの部位の中で栄養や脂肪の多い皮や卵のみを食べる事がある。しかし、身を食べることもあり、絶対に皮しか食べないというわけではない。
むしろ、アメリカのヒグマに比べてよく身を食べる。アメリカのアラスカでは、サケが大量に獲れるため、より効率的に栄養を摂るために身を食べないのだとか…。アラスカは気温が低いこともあり、クマも沢山脂肪を摂るらしい。

No.
DATE

〈4. ヒグマのサイズ・習性・特徴など〉

〈サイズなど〉

成獣（大人）で体長は、オス約2m メス約1.5m 体重はオス約150～400kg メス約100～200kg。北海道で1番大きいヒグマは2002年に知里町で発見された体重400kgのクマ。走る速さは時速60km。（車と同じくらい）

〈習性〉

・夜間のほか、日中も行動する。人を避けて、藪などに隠れて行動することが多い。逃げるものを追いかける。時速60kmくらいで走ることができる。視力よりも嗅覚がすぐれている。

例：ヒグマが2本足で立っているときは、周囲のにおいや音を感じて、まわりの状況を確認しようとしている行動といわれている。

・学習能力が高い

例：味を覚えると、その食べものに執着する。トウキビや果樹、人の出す生ゴミなどの味を覚えると繰り返し出没する。シカなど、一度に食べきれないエサは、土をかけて自分のものとして占有する。←どまんじゅうという。

・子供のヒグマを守る母熊は危険。これはヒグマに限らず大抵の哺乳類に言えること。母グマは自分の子を守るために、近寄るもの全てを敵とみなす。小さいヒグマを見つけた時には、「敵意を持った母グマが近くにいる」と思って警戒するようにする。

・ヒグマは火を恐れない。獣は火を恐れるというのは事実だが、ヒグマは例外。過去にヒグマの襲撃を恐れた事例では、みな火を一生懸命に炊いて難を逃れようとしたがどれも効果はなく、無残な結果をもたらすことになった。ヒグマの前に火は無力。

〈特徴〉

・針葉樹林を中心とした森林地帯に生息する。

食性は雑食だが、同じクマ科のツキノワグマに比べると肉食の傾向が大きい。シカやネズミなどの大小哺乳類やウグイやマスなどの魚類、果実などを主に食べる。トラやオオカミなど、他の肉食獣が殺した獲物を盗むことも近年の研究で明らかになった。家畜はヒグマにとって格好の獲物であり、襲撃も増加している。

稀に人を食すこともある。1度でも人を食べたヒグマはあめて人間を襲う傾向が

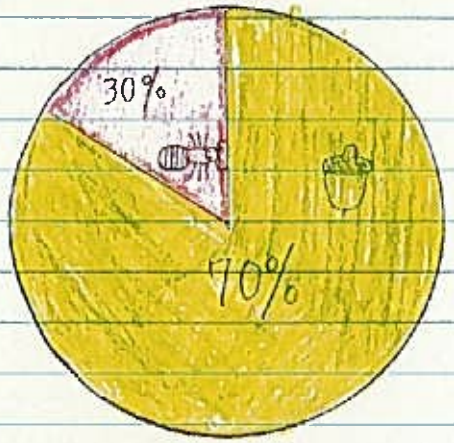
No.
DATE

あり、きわめて危険である。また、自分が捕獲した獲物に対して強い執着心を示すため、ヒグマに食われた物を取り返す行為は危険である。地上を走行するときには時速約50km～65kmとされている。

・川を遡上する鮭を待ち伏せして捕食することも有名である。ただし、ヒグマの栄養源のうちサケが占める割合は北米沿岸部の個体群では栄養源全体の30%以上であるのに対し、知床半島に生息するヒグマでは栄養源全体の5%にすぎなくなっているとされ遡上減による生態系への影響が懸念されている。

・冬季には巣穴で冬眠をする。冬眠中には脈拍、呼吸数が大幅に減少する。この間(通常7ヶ月)に出産するが、出産したばかりの子供の体は非常に小さい。冬眠しない個体もあり、人を襲う場合もある。

↳森林に生息・肉食の傾向も あまり鮭を食べない 脈拍の減少



植物(ドングリ・サルナシなど)
動物(サケ・シカ・アリなど)

サケやシカを食べているイメージが強かったから動の方が多いと思っていたけれど、圧倒的に植の方が多くて驚いた。

←食べる物の割合

〈実際にクマを見た感想・思った事〉

過去に数回知床に行った時、毎回秋だった。
クマが冬眠に向けて食料を確保するため、活発に活動していた。
実際に川でサケをとって食べているクマを見かけたりもした。とるのが上手なクマは、太っていて下手なクマは痩せているように感じた。自然界の厳しさがよく分かった。

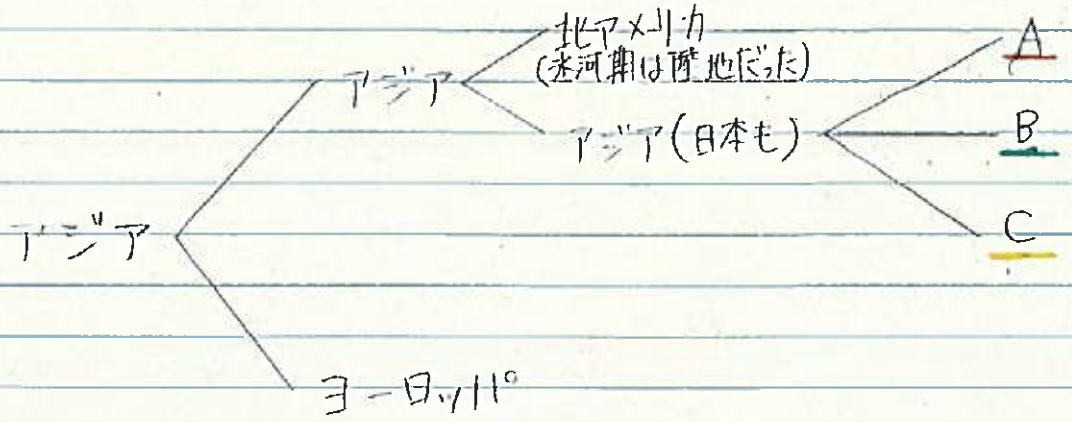
〈両親から聞いた話〉

私の両親は、知床でバスのドライバーとバスガイドをしていたので熊エピソードを聞いてみた。
父は木に登っている子熊を見たり、5m幅の道を飛び越えたのを目撃したそう。
母は案内している時に100m先に熊がいてさわがずにしっかり対応したそう。
冷静に対応する事が1番大切だと言っていた。

〈5. ヒグマの歴史〉

〈ヒグマには3系統ある〉

アジアが起源。ヒグマには3系統ある。北方経由2通りと南方経由1通り。



A (道南型)	B (道東型)	C (道北一道東型)
・最初に北海道に来た。 ・中央アジアに生息する チベット系のヒグマと近縁。 ・日本がアジア大陸と陸続きだった氷河期に、大陸から本州を渡ってきた。	・2番目に北海道に来た。 ・現在アラスカ東部に生息するヒグマと同じ系統。 ・アジアのヒグマが南のサハリンを通って北海道に来た。	・最後に北海道に来た。 ・現存シベリアや北欧 西アラスカに広く分布する系統。 ・Bと同じでサハリンから来たが、Bとは違うルート。

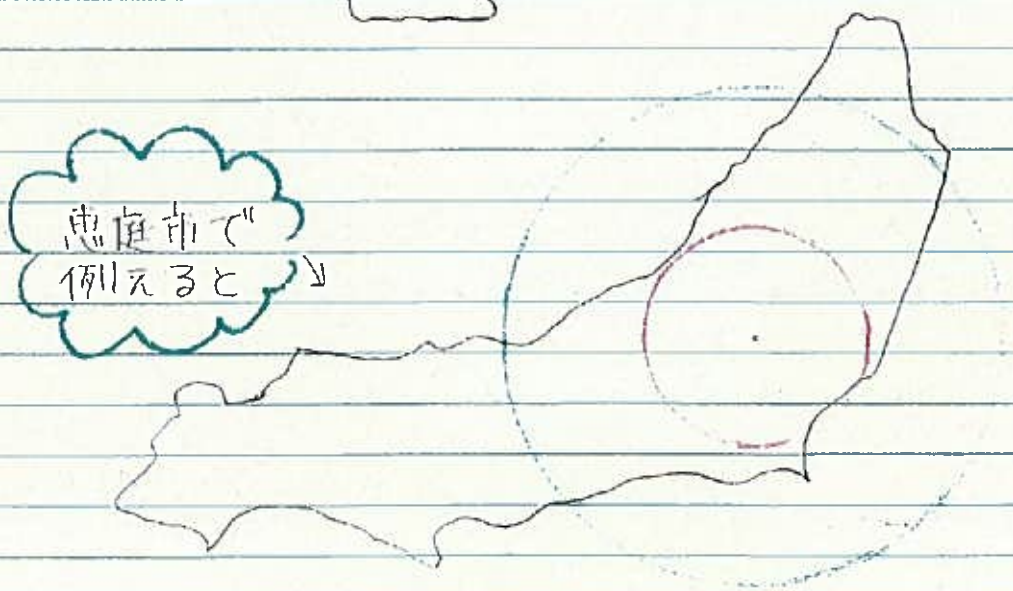
〈本州を渡ってきたのになぜ現在は本州に生息していないのか〉

昔は本州でヒグマが生活していた。本州で、化石が発見されている。この時代は本州でツキノワグマとヒグマが同じ生息地を共有していた。しかし、やがて氷河期が終わり、地球が温暖になって本州の植生が変わると、その変化についていけずに、あるいはツキノワグマとの競争に敗れて、本州に生息していたヒグマは絶滅したと考えられている。

〈6、ヒグマの行動圏〉

〈行動圏〉

ヒグマは、お互いを排除し合うような固定したなわばりを持たず、重なり合った個々の行動圏（行動範囲）を持っていることが明らかになっている。行動圏の広さはオスが数百km²メスが数十km²と、メスよりもオスの方が広い事が明らかになっている。オスは繁殖のためにメスを探して歩き回るため広くなる。



No.
DATE

〈7.8 なぜ街に？どうして人を襲うのか？〉

〈なぜ街に出没するのか〉

・食料不足がクマ出の原因ではない
ブナ類の不作は大量出没の一因ではあるが全ではない。
2008年にブナの大凶作によるクマの大量出没を森林総研が予測した。が、結果は平穏だった。
原因は人間社会の社会構造の変化による影響が大きくなりつつある事。
社会構造というのは、いわゆる里山の荒廃である。
かつて、集落に近い里山は、炭焼きや草刈り場として人間の手が頻繁に入っていた。そのためクマはその奥にある奥山にしかいなかった。しかし、平成になってから里山を管理する人が減り、里山が奥山のように繁茂すると、そこに若いクマやメスのクマ、親子グマが居つき始めた。

・なぜ若いクマやメスのクマは奥山を出たのか
クマにとって最大の敵はクマ。奥山には大きくて強いオスクマがいるため、それを避けるように里山へと逃げてきた。

・数が増えたから→なぜ増えた
繁殖するのに、自分よりも強いオスにメスが取られるため、別の場所に行って探すため移動している。
1990年以前はヒグマ根絶を目的とした道「春グマ駆除制度」により、全道各地で春に冬眠から目覚めたヒグマを追いかけて、わなや銃で駆除し続けていた。やめた頃から2倍以上に増えている。

〈どうして人を襲うのか？〉

里山に住んでいるクマは、人間との接触の機会が増えることで、とくに若いクマは人間を恐れなくなるという。→襲う原因につながる。

・3パターンある
1　排除（不意に出会った場合など）
2　戯れ（じゃれ気で）
3　食べるため←1度人を襲ったクマは人間の味を覚えてしまう
↳ 3の場合は早く駆除しなくてはいけないが、ハンターが不足している。現役ハンターの高齢化に加えて、猟銃所持の規制も強化されている。ヒグマ対策はヒグマが出没した自治体が単独で行っているため、道東のハンターが札幌の有害クマを駆除する事もできない。これも被害者が増える原因の1つ。

No.
DATE

〈9. 万が一出会ってしまった時の対処法〉

〈逃げ方〉

・熊との距離が100m以上

クマがこちらに気付いていない
気付かれないように、クマを見ながら静かに避難する。

クマが近付いてきている
クマは人であることを認識すると、基本的にその場から立ち去る事が多い。
人の方に近付いている場合は、こちらが人であると認識していない可能性がある。
こちらが人であると理解させるために石や倒木の上に立って大きく腕を振りながら穏やかに声をかける。

人だと認識しても近付いてきている
非常に稀なケース。上記の行動をとっても逃げない時がある。これは、クマが捕食目的として近付いている可能性が高い。車内や木の上など、すぐに避難できる場所があればそこへ退避。

・クマとの距離が20〜50mの場

あわてずにゆっくりと両手を大きく振りながら、穏やかに声をかける。
突進に備えて、クマとの間に障害物（立木など）が来るように静かに移動する。

クマがこちらを無視している場合
上記の行動に加えて、クマから目を離さずに、ゆっくり離れる。急な動きはクマを興奮させてしまう。
また、逆にこちらが動かないでいると敵だと判断されて襲われる危険性が高くなる。

・クマが目の前にいる時に遭遇した場合（20m以内）

驚いて突発的に走って逃げたり、大声で怒鳴ったりすると、クマは防衛的な攻撃をしてくる。クマも人を恐れているため、更に怯えさせると、ストレスのあ

より暴走してしまう事もある。
静かに落ち着いて両手を大きく振りながら退避する。
クマを見て穏やかに声をかけながら後ずさりする。

・クマが突進してきた場合

威嚇突進の場合
突進の多くは、威嚇のための突進で、途中で止まって後退する場合が多い。
この場合、穏やかに声をかけながら、クマとの間に障害物を置くように、ゆっくり後退する。
クマ撃退用スプレーがある場合は、噴射準備をする。

本当の突進の場合
突進が止まらず、3〜5mの位置まで接近してきた場合、クマ撃退用スプレーをクマの顔に全量を一気に噴射する。
スプレーが効かない、またはスプレーがない場合、その場に倒れこんで防御姿勢をとる。

・襲われた時の防御姿勢

クマから攻撃を受けそうになったら、受けるケガを最小限に抑えることが重要。

- 首の後ろに両手を回し、うつぶせになる。
  (首、顔、腹部の急所を守るため)
- リュックサック等を背負っている場合は、背負ったままでいるとプロテクターの代わりになる。
  (プロテクター → 体を保護する用具)
- 転がされても元の姿勢に戻る。

No.
DATE

〈10 結論・感想〉

〈結論〉

ヒグマが街に来るのは、里山の管理をする人が減り、里山にクマが住みついたため、近くの街に来てしまう。
他にも、クマ自体の数が、駆除をしなくなったため2倍以上に増えている。
駆除をするハンターの高齢化が原因の1つだと考えられる。
人を襲うのは、1度人間の味を覚えてしまうと、また、人を襲う傾向があるから。

〈感想〉

今まで、あまり考えた事がなかったクマの事を調べ学習を通して学ぶ事ができたのでとても良い機会だった。昔は、クマを見つけると、ついうれしくなってしまっていたけれど1つ対応を間違えると命にも関るような事になると思った。クマの事を調べていたら、ハンター不足などの問題もあり、少し興味がわいたので今度調べたいと思った。ヒグマの問題は私が思っていた以上に深刻な問題だという事に気が付く事ができた。

〈11 参考文献〉

本

本の名前	著者名	出版社	借りた場所
熊のことは熊に訊け。	岩井 基樹	つり人社	恵庭市立図書館
ヒグマのそこが知りたい	木村 盛武	共同文化社	恵庭市立図書館
人を襲うクマ	羽根田 治	山と渓谷社	恵庭市立図書館

インターネット

https://www.city.sapporo.jp

https://longmi.jp

https://ja.m.wikipedia.org

https://scienceportal.jst.go.jp